詩集「處女林のひびき」の終りに

先輩や朋友に、牽かれたり押されたりしながら、私は遂にこの書を出してしまつた。いく度内容をとり換へて見たり、いく度中止を思つたことか。それは貧弱な内容と、それに要する費用とが、一方ならず私を苦しめたからである。無意義以上の、道楽さえ思はれたからである。同じ金をかけるなら、弱いこの肉體のために、沃度カルチウムの注射でもしたなら……。またその一部をさいて、一週一度の洋食デーでも設けたなら、定めし貧しい家族の者たちも喜ぶことだらう。いやそれよりも、卒塔婆一本立てる者の無いあの地下の伯父のために、小さい墓標でも立ててやつたら……。否々それよりも、あの死體さえ爭つて喰つてゐるといふ憫れな露國飢餓民のために……。私は、洗濯板のやうに手にかかる胸を撫でながら、いろいろ考へた末に、また私自身が可愛くなつてしまつた。そして到當この書を出してしまつたのである。三十年以來の酷暑といふ九十數度の一室に、頭の芯まで熱くして、赤インクに指を染めながら、今校正を終つた私は、小さい窓から、青黒い世の荒波を眺めてゐる。そこには今、初舞臺に立つ女優のやうに、身を顫はせながら、一つの魂が入つて行く……。

おお幸あれよ！おお幸多かれよ！（一九二二・九・一二日）

大正十一年九月二十日印刷
大正十一年九月廿五日發行

（定價金貳圓）

■處女林のひびき■

著作者　槇本楠郎
東京府中澁谷町二六〇番地
發行者　中山軍治
東京府中澁谷町二六〇番地
發行所　成蹊堂書店
電話青山一〇一四番
振替東京四九八四番

印刷者　渡邊平吉
東京市本郷區元町二ノ六十六
印刷所　鮮明舍
東京市本郷區元町二ノ六十六

189
412

終